

気象学者のための英語(6)*

木原 研 三**

大気の運動を力学の方程式に表わし、それを解くことによって将来の状態を計算から知ろうとするところみは、かなり以前からあった。理論の発展、高層観測の増強整備、計算機械の発達の三条件が、どうやら満たされるようになった戦後は、このところみが相当程度の結果をうるようになった。これが数値予報である。

この方法で予報をすれば、総観解析にもとづく判断よりも、個人的要素が少ないので、より客観的に予報の結果を出すことができる。

一見平易で明快な文章だから、そのまま英語に置き換えて行けばよさそうであるが、やはりそれでは駄目である。英語として読めるようにするには、日本語の one sentence を英語のそれに変えるだけでなく、英語の sentences の並べ方、そのつなぎ方にも工夫が必要である。

まず最初の文で、「…かなり以前からあった」の訳は十人十色であったが、There have been many years since (予報部N氏)は英語ではない(フランス語では Il y a longtemps que…というが)、Many years have passed since とすべきである。海洋研K氏の Considerable time passed since は has passed と現在完了にする。since several decades ago (岡山大S氏)、since a long time ago (観測部M氏)は意味はわかるけれども、since~ago という形式は英語の慣用ではない。An attempt to…has been made since the world war II (通報課K氏)は、このような企てが戦前からあつたという事実を無視している。The attempt to…has been made for a long time (地磁気観測所S氏)も一応良さそうだが和臭を免れない。それに、この型にすると主語と動詞の間に不定詞の長い修飾句がはいる。この程度の長さなら構わないが、それを避けなければ、「~のところみは決して新しいものではない」と考えて The attempt is by no means new to predict…のように主語と修飾句の間に動詞を入れてもよい。また「この新聞は一週間前のだ」を This paper is a week old. と訳せるのを利用して、The attempt is several decades old to predictとしてもよい。(Meteorological Office 編 “A Course in Elementary Meteorology”によると numerical fore-

casting の first practical attempt は 1922年 Richardson によってなされたようである)。there were some trials that one predicts…(岡山大S氏)は trials に that-clause をつないでいるが、これは不可。trial や attempt には不定詞が続き、that-clause とは続かない。attempt の代りに scheme (航空気象台A氏)は不適当。

さて attempt に続く不定詞の部分であるが、attempt to predict the future status (state とすべし) of the atmosphere from computational results, obtained by expressing atmospheric motions in a set of dynamical equations and solving these equations (予報部N氏)は、なるほどその通りであるが少しゴタゴタしている。Pettersen, “Introduction to Meteorology” に These laws make it possible to compute a future state from an existing one. とあるのを利用して attempt to represent the atmospheric motions by dynamical equations and compute the future [state of the atmosphere by solving them または attempt to compute the future state of the weather from dynamical equations representing the atmospheric motions とする。岡山大K氏の attempt to calculate future states of atmospheric motions by expressing them with equations of dynamics も思い切つて余分なものを切り捨てたためにすっきりした文であるが、motions (動き)の states ((静止した)状態)はちよつと矛盾のような気がする。それと by expressing them だけで「解く」を省略したのでは、表わしっぱなしと取られぬこともなかるう。ついでにもう一つ切り捨てて calculate the future state of the atmosphere by means of equations of dynamics としてはどうか。この後に expressing its motions をつけて

* English for the Meteorologist

** K. Kihara お茶の水大学(英語学担当)

もよい。なお the dynamic equation describing (航空気象台Y氏), described in dynamical equations (高松M氏)にある describe は、ことばで叙述する場合か、実際に描く(たとえば describe a circle)場合に用いる語で、equation は describe しないものである。

「理論の発展」は the progress of theoretical studies (予報部N氏), progress of theoretical meteorology (海洋研K氏)がよい。単に development of theory (岡山大S氏ほか)だけでは何の theory なのかわからない。

「高層観測の増強整備」の内容を忠実に訳すと increasing the number of fully equipped upper-air observations (航空気象台Y氏)や the rapid increase and improvement of upper air sounding stations(予報部N氏)となるが、前者はただ数をふやしただけと取られ、後者では(機械でなく)測候所が improve されるというのが異様である。もっと簡単に the advancement of upper air sounding (観測部M氏)ぐらいでよいと思う。ただし advancement は「促進すること」または「地位の昇進」の意に用いるのが普通で、「進歩」の意には advance (航空気象台A氏)を用いたほうがよい。upper air, upper-air とまちまちであるが、形容詞的に用いる場合は upper-air としたい。名詞として in the upper air などと言うときは hyphen はいらない。

「どうやら」を和英辞書でひくと barely が示されているのでこれを使った人がかなりあった。これは We had barely time to catch the train. (どうやら汽車に間に会った)のように、すれすれの場合に使うことばで和英辞書の訳語をう呑みにしてはいけないというのはこういうことが有るからである。通報課K氏の hardly は否定的な意味になるので論外、名古屋S氏の gradually も不適當、予報部N氏はさすがに somehow としている。観測部M氏の the fulfilment of a good extent of the three requirements は初めの of を to にして to a good extent を挿入句にし、fulfilment~of the three requirements と続かせるとよい。なお同氏は三つの原因をあげた後、respectively を加えているが、これは不要。これが必要なのは、A, B, and C have X, Y and Z, respectively. のような場合で、これによって、A, B, C, が X, Y, Z を共有しているのではなく、A が X を B が Y を、C が Z を「それぞれ」所有していることが示されるのである。

さてこの文をまとめるに当たって、前の文とのつながりを考えてみると、「…はかなり前からあった。しかし

それが相当の結果をもたらしたのは、やっと戦後になってからであった」ということになる。そこで It was only after the war when...that this attempt began to yield satisfactory results とするのが最善。「戦後」を after the World War II とした人が多かつたが定冠詞は不要。the Second World War のときは定冠詞がつく。

その次の文は This is what we call numerical weather prediction(航空気象台A氏), This attempt is called the numerical prediction (仙台Y氏)などでよいが、後者の the は不要。また attempt より method のほうが良い。多くの人は prediction を使っていたが、英語の本では numerical (weather) forecasting のほうが多いようだ。ただし、この短い文をポツリとここに置くことが文章全体の流れから良いかどうか英語としては問題である。もっと前のほうに持って来たほうが良さそうである。後に掲げる訳文参照。

最後の文では「個人的要素」をどう訳すかが問題である。lack of subjective elements (名古屋S氏)の lack は不適當。これは有るべきものが無い場合に使われる語である(たとえば lack of courage)。being free from subjective judgements とでもしたい。element を使いたければ、最後に回して because the personal element is less likely to enter into them としてはどうか。has less personality (地磁気S氏)の personality は「個性」でこれも不適當。これは「いくらか客観的にやろうとしても最後にはその人の個性がにじみ出る」などという場合に使うので、ほめた言葉である。

紙数が無くなったので全体をまとめてみる。Attempts at numerical forecasting, that is, to compute the future state of the atmosphere from dynamical equations representing its movements, are by no means new. It was, however, only after World War II, When the three requirements, i. e. progress in theoretical studies, advance in upper-air observation and development of high-speed computing machines, had been more or less fulfilled, that these attempts began to yield notable results. Being less dependent upon personal judgment, forecasts by this method have the advantage of being more objective than those based upon synoptic analysis.

以上で今回の講座は一応打ち切ることにした。毎回熱心に訳文を寄せられた投稿者諸氏に感謝する。(完)